

清風会視察報告書

日時：平成27年2月5日（木） 10：30AM~3：00PM

場所：十和田市現代美術館、十和田市（仮称）教育プラザ、市民交流プラザ、

参加議員：堀崎松男、宮澤憲司、高屋敷英則、畑中勇吉、小柳正人
友好会派 山口健一

* 十和田市現代美術館の建物は、建築界のノーベル賞といわれるプリッカー賞を受賞された建築家西沢立衛氏の建築設計である。十和田市ではより魅力的で美しい官庁街通りの景観を作り出すと共に、未来へ向けた新しいまちづくりの一環として「ART TOWADAS」計画に取り組み、2008年に十和田市現代美術館を開館、引き続いて美術館向かい公園にシンボルアートの設置を行い、野外芸術文化ゾーンを2010年春に完成したとのことである。

美術館の特徴は、個々の展示を独立させ敷地内に建物を分散して配置し、それらをガラスの廊下で繋いであることである。この分散型の構成は、広場と建物が交互に並ぶ官庁街通りの特徴から着想を得ており、アート作品と都市が有機的に混ざり合っているとのことである。そして、美術館自体の建物に大小のボリュームをつけることで、大小の建物が並ぶ通りの景観と連続性を持たせており、さらに、この分散配置は、屋外展示スペースやイベントスペースを生み出し、来訪者は屋内空間と屋外空間を同時に体験することが出来るとのことである。

(所感)

常設展示作品の中で、圧巻なのはオーストラリア人のロン・ミュエク氏作の「スタンディング・ウーマン」であった。高さ4メートル近くある女性像は、見る者を圧倒する迫力があり、肌、皺、髪の毛の一本にいたるまで、人間の身体の微細な部分を克明に再現しながら、スケールにおいて大胆な作品であった。屋外に展示されている「フラワー・ホース」や巨大化した真っ赤な「ハキリアリ」などの作品も、見る者にはかなりのインパクトを与える作品と思われた。官庁街通りを隔てたアート広場には、メルヘンチックな巨大で色鮮やかなキノコや動物などのアートが点在し、周囲の桜並木が芽吹く頃には、子供たちの笑顔と歓声が木霊すことであろうと思われた。

* 十和田市（仮称）教育プラザでは十和田市教育委員会市民図書館の館長 佐藤俊文氏から施設等の説明を頂いた。（仮称）教育プラザは市民図書館と教育研修センターの機能を併せ持ち、官庁街通りに面している。建物は新国立競技場を設計されている安藤忠雄氏の設計で、鉄筋コンクリート平屋建て約3,200㎡、建設費約14億2000万円は合併特例債を活用したとのことである。1期工事終了後の今年1月15日オープンした図書館は蔵書数約13万冊、閲覧席100席、新聞・雑誌コーナー、AV・インターネットコーナーを併設。また、年間800冊ほどあった蔵書紛失防止のために、各蔵書にICチップを貼り付けるなどICシステムを活用しているとのことである。建物の特徴としてはサンルームのスペースが4ヶ所あり、大きなサンルームスペースでは飲食OKで、空間を活用したイベントの開催や様々な人が出会うコミュニケーションの場としての活用が期待できる作りとなっている。本棚はもちろん椅子、テーブル等も安藤忠雄建築設計事務所の作であり、ゴミ箱一つ置くにしても同事務所の許可が必要とのことであった。近年設計の建築物にしては、再生可能エネルギーの活用は見られず、館内の暖房はすべて電気でまかなっており、電気料が月150万円ほど掛かるのが気がかりとのことであった。

（所感）

旧図書館の1日平均入館者数が約200～250人であったものが、新図書館になってから1日平均入館者数が約880人になったとのことであり、冬場にしてこの数字と考えれば、全面オープン後の入館者数は今以上に増加が見込まれ、市の中心部にある官庁街の賑わい創出に大いに貢献するものと思われる。当日は木曜日の昼過ぎにもかかわらず、大学生と思われる若者が多数入館しており聞くところによると、北里大学獣医学部が十和田市にあるとのことであり、若者不足？の久慈市には羨ましい限りである。

十和田市の官庁街は桜並木となっており、（仮称）教育プラザの中庭にも樹齢100年と言われる桜があるなど、近代巨匠の建築物が立ち並ぶ街並みと共に咲き乱れる桜の花々を想像するにつけ、春の良き日に再訪したいものである。

* 市民交流プラザは床面積約1650㎡設計工事費約6億円で、東京銀座にある歌舞伎座を建築設計した隅研吾氏の作品であり2014年10月14日オープンとのことである。外壁はガラス張りに杉の板を縦列に並べたデザインの平屋建てで、館内はオールバリアフリー化されており、暖房はペレットを燃焼させて全て賄っているとのことである。また、館内には多目的研修室や小学生低学年以下を対象としたプレイルーム、キッチンスタジオなど13室があり、にぎわいと活力あるまちづくりを目指した、市民交流と市民協働を推進する施設として、大いに活用されているとのことであった。

(所感)

近年、ハコモノ行政に対する風当たりが強い中、十和田市においては現代美術館、市民交流プラザ、(仮称)教育プラザと立て続けに整備されたが、財政的な負担等を熟慮した上での施策であろうと思われ、羨ましい限りである。其の上、安藤忠雄氏をはじめ、著名な建築家に設計デザインを依頼されたそれらの建築物を官庁街周辺に配置し、十和田市の新しい「魅力ある顔」として全国に発信され、交流人口の増化や市街地の活性化に結びつけようとの施策であろうと思われる。

久慈市における市街地の活性化を考える上で参考になった(仮称)教育プラザ的施設を久慈市においても整備することが可能であれば「賑わい創出」に結びつくものと思われる。広い意味での交流人口の増加策は、十和田市にはない三陸海岸、ジオパーク、白樺林等の山・里・海の魅力発信に更なる叡智を注ぎ込むことであると再認識させられた。